

家庭・保育所・幼稚園

# 幼児の教育

1992 2

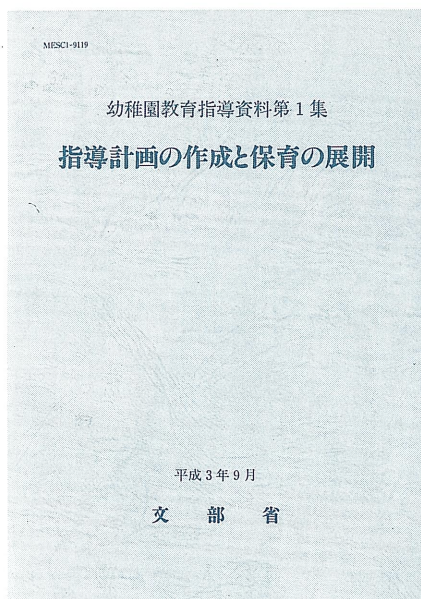


第91巻 第2号 日本幼稚園協会

## 幼稚園教育指導資料 第1集

# 「指導計画の作成と保育の展開」

新教育要領の趣旨にそつた幼稚園指導計画の作り方と保育の展開方法について事例を中心にまとめた解説書。

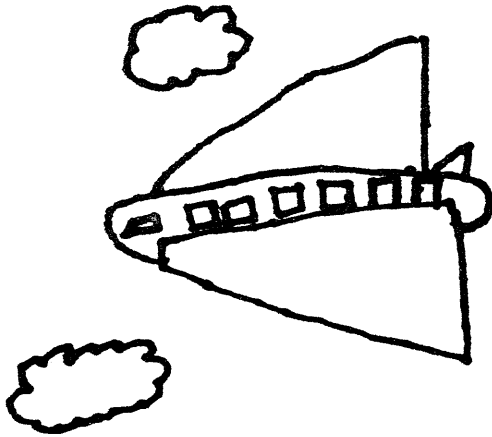


保育の基本となる指導計画の考え方や環境構成、活動の展開、教師の援助、保育の展開のあり方など保育現場の身近な問題について総合的にとらえたもので、幼児の発達に合わせた保育実践の指針となるもの。

文部省・著 A5判・88頁・定価110円(税込)

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)3292-7783(代)にお問い合わせください。

# 幼見の教育



第91卷 第2号

# 幼児の教育 目次

— 第九十一卷 第二号 —

© 1992  
日本幼稚園協会

いつの時代にも コルチャックの著作を読んで……………津守 真…(4)

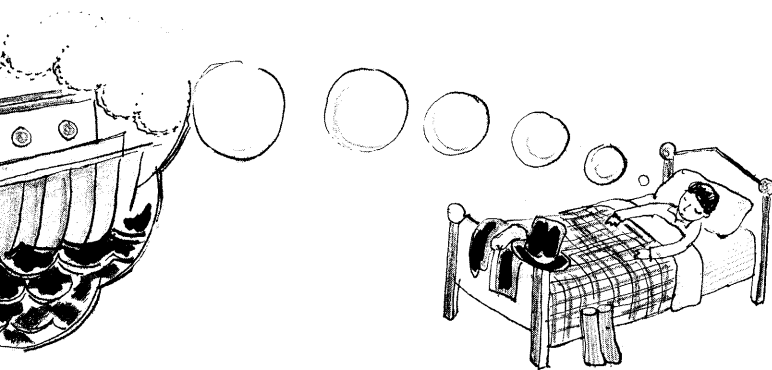
ソ連社会体制の変化と幼児教育の問題……………伊集院俊隆…(10)

附属幼稚園の教育(1) 主体的に行動できるとは……………村石 京…(18)

遊びのスクランブル交差点 おみせやさんごっこ(1)……………仲 明子…(23)

園庭より(17) 手紙……………松井 とし…(32)

△随想▽ なれ……………村田 修子…(34)



故国を後にして(5) 笑い葉……………モーレンキャンプふゆこ… (42)

旅して想うこと……………E・K… (48)

チェコ便り(12) 母と子でつくる民芸品……………大梶 優子… (50)

ある日の育児日記から(14)……………佐藤 和代… (57)

若いお母さんたちへ ファミコン考……………渡部みさ子… (58)

表紙・平野 清

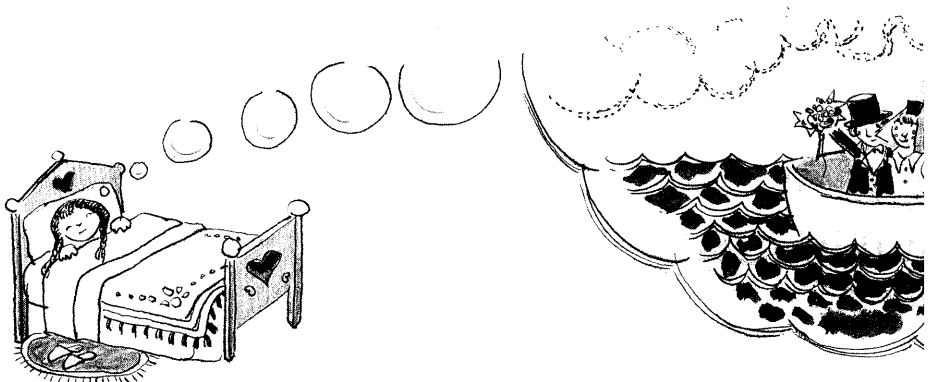
扉題字・堀合 文子

扉カット・お茶の水女子大学附属幼稚園園児

カット・福田 理恵

編集委員・本田 和子／吉岡 晶子・岩上 節子

編集部・大沢 啓子



## いつの時代にも

### —— コルチャツクの著作を読んで ——

津守 真

「子どもの権利条約」についてのOMEPPフォーラムが開催されることになり、ポーランドOMEPP委員会委員長であるシコルスカ女史が来日されることになった。そのため心の準備にと、私はヤヌシュ・コルチャツクの著作集を開いた。

『寄宿学校』と題する英文で九〇ページ程の文章の冒頭は次のことから始まっている。

「私の書物は、できるだけ短く書くことにしている。それは、私の若い同僚たちは、最も困難な教育問題と最も複雑な人間の条件の中に巻き込まれて、茫然自失し、憤り、助けを求めて叫んでいる人々だからである。

この人たちには本を読む時間などない。

一晩のうちに二度もベッドからひきずり出される。ひとりの子どもは歯が痛いと言って

泣く。彼は子どもを励まし、慰めねばならない。ようやく再び眠りにつこうとすると、他の子が騒ぎ出す。その子はこわい夢を見たと言う。死体とか泥棒とか。彼を殺そうとし、川に投げこもうとしたという。そこで彼はその子を慰めもう一度眠るように言いかけせる。

疲れた男は、夜になって分厚い教育書を研究することなどできはしない。十分に眠らなければ昼間いらついで、彼が、学んできた貴重な考えを遂行することができない。だから、私は簡潔にして、夜の休息が妨げられないようにしよう。」

私は本を閉じて考えた。これは彼の時代のことだけではない。現代の保育者はこれほど大変な環境におかれてはいないが、子どもと一緒に生活する者には本を開く時間は多くはない点と同じである。そういうときにも、ひととき静まって考える必要があることはどういうことだろうか。

『寄宿学校』は次のようにつづく。

「若い教師は、以前には子どもたちのために面白いことを用意し、子どもたちを驚かせるようなことを準備したのに。いまや、彼は、『今日も何も変わったことはなかった。いつもと同じ』と記録することができれば、それで感謝している。だれも窓ガラスをこわさず、だれも嘔吐せず、鋭い叱責の声をきくことがなければ、それが良い一日なのだ。」

彼は活力を失いつつある。小さなできごとには目をつぶり、必要なことだけに耳をかす。

彼は自発的な力を失いつつある。以前には、玩具やキャンデーを貰ったとき、どう用いればよいかをいろいろと考えた。いまや、彼は手早く分配する。早く分配する程トラブルが少ない。

彼は自分自身に自信を失いつつある。以前には毎日子どもの中にも自分の中にも新しいものを発見していた。子どもたちは彼を好きだったのに、いまや距離をおいて彼を見ている。……」

私は再び本を閉じて考えた。

これも彼の時代の苛酷な条件の下だけのことではない。私自身にも、私の周囲にも起こることである。私共は、いつのまにか、子どもを安全なように見張っていて、事なく一日が過ぎればそれでよいと思っている。

危険が起こらないようにと念じつつ子どもを見ているときにも、見方を少し変えて、その時を子どもと親しむ時にしようと、一瞬気を取り直すと、それだけでその時の意味は違ってくる。

保育者としての毎日の生活の疲れが溜ってくると、子どもたちの中にいて本当に大切なことは何なのかが見えなくなってしまう。どうしてなのかはよく分からないが、それはだ



れもが経験する事実である。そういうときに、立ち返って思い起こす必要のある大切なことは何なのか。私なりに考えてみた。

子どもと一緒にいるときに、子どもも私も人間として対等である。どちらかが指導し、どちらかが指導される人なのではない。どちらも人生の大切なひとこまをその時に生きている。一方は生涯の始まりを、私は生涯の終わりの方を。

別のことばで言えば、どの子どもも、子ども自身がそれでいいと思うように振る舞うことを承認することである。もっと違ったように行動することを期待しはじめたら、その子どもがあるがままで堂々と生きることを望んでいないことになる。

子どもが、自分で歩いてゆこうと思う所に自分で歩いてゆくこと、自分ができることを自分でしようと思つてすること、保育者がそれを承認して一緒に生活するうちに、保育者にも思いがけない面白い生活が開けてくる。子どもの心の奥から、その子らしい発想が静かに湧いてくるのだろう。そこが出発点である。

「何をなすべきかではない。何が可能なのだ。」

保育者が疲れているときには、それなりに何ができるかを工夫したらどうだろうか。一緒に身体を休め、神経を休めると、子どもにも安らかなひと時が生まれることもあるだろう。そんなときにも、頭の中で何をなすべきかを考えていたら、自分も子どもも周囲の人

たちも苛々してくる。このこともコルチャックの時代と現代と共通のこのようだ。

「自分自身に真実であれ。あなたの道を求めよ。子どもを知ろうとする前に、あなた自身を知ること学べ。」

最大の誤りのひとつは、教育学はこどもの科学だと考えることだ。否。それは人間の科学である。

衝動的に動く子どもは怒りのためにだれかをぶつ。大人は怒りのために人を殺す。

素直で善良な子どもが、だまされて玩具を取られる。大人はだまされて契約書に署名する。……

子どもがいるのではない。人間がいるのだ。

未成熟だって！ 老人にたずねるがよい。四十歳の男でも未成熟だ。社会も未成熟だ。

国家も外国の助けを必要とする。

自分自身であれ。そして子どもを注意深く見なさい。彼らが自分自身でありうるときに、彼らをそのままに見なさい。要求するのではなく。」

コルチャックは、『寄宿学校』の冒頭で、短く書くなどと言いながら、九〇ページを費して書きつづけている。ここに紹介したのは、その最初の一五ページ程からの抜粋である。

先日、私は岩波ホールで、映画「コルチャック先生」を見た。私共の時代に起きた出来事なので、時に心を打たれる。彼の生涯は特別なものである。けれども、彼が書き残したものは、特別なことではない。どの時代にも、どこにでも、共通に起こっていることである。

“Selected Works of Janusz Korczak” The U. S. Department of Commerce,  
Clearing house for Federal Scientific and Technical Information, Springfield,  
Virginia, 22151, (1967)



(愛育養護学校)

# ソ連社会体制の変化と

## 幼児教育の問題

伊集院 俊隆

### 一、ソ連における幼児教育体制の特徴

現在ソ連全体で就学前教育施設に通う子どもの数は一七〇〇万人と言われ、その数は十月革命以来ずっと増え続け、今日では質量ともに世界一と言える。三歳以下は保育所、三歳〜六歳は、幼稚園、そして二か月から六歳までは、保育園と三つの基本的タイプが出来たのは、一九六〇年代になってからだった。七〇年代には、経済的観点が考慮されて、三〇〇〇人を越す大規模な幼稚園、保育園があちこちに見られるようになった。

六〇年代に入って、当時世界唯一といえる就学前教育

研究所（連邦立）が、約五〇人の所員で心理学博士A・ザポロージェツ氏の指導下に設立され、二五の実験園を擁して、保育内容の科学的研究のセンターとなり、研究員も後には一五〇人となった。この研究所を中心に、全連邦的な保育カリキュラムが作成され、幼児教育の指針として、数度の改訂を経て今日に至っている。

ソ連の幼児教育の発展にそもその最初から大きな力をつくした人として、レーニンの夫人、クループスカヤ\*があげられる。一九一七年の十月革命の後、教育人民委員部が設置され、その指導者の一人として、また国家学



術會議（グースと略称）の指導の一員として、社会主義政権下での自由で創造的、民主主義的な、あるべき教育の姿の展開に貢献した。一九二〇年代には、ヴィゴツキー、シャッツキー、ブロンスキー、アルキン、それにマカレンコといった心理学者、教育者、医師らの活発な協力活動があったが、その後、三〇年代のスターリン官僚主義、四〇年代の第二次大戦、戦後の復興期の困難期を経て、六〇年代初期のフルシチョフの「雪どけ」期になって、ソ連の幼児教育界は、真の発展期を迎えた。

事実、前述のクループスカヤの教育学に関する論文集が出版され、ヴィゴツキー門下のエリコニン、ザポロージェツらの心理学者の研究が公刊されはじめたのもこの時代であった。さらに三〇年代後半に禁止状態になった「児童学」の冷静な再評価が進められはじめていた。

ところで、ソ連の幼児教育施設は、幼児の教育とともに婦人の職場進出を補完するという重要な機能をもっているために、日本風にいえば、元来、長時間保育体制がしかれている。さらに、教育は無料という社会主義制度

によって、完全な給食制度があるにも拘らず、公的補助のために、実に低廉な両親負担であることを特徴として  
いることは、よく知られている。

## 二、ペレストロイカとその影響

教育理論、とくに制度は、時代と政治の影響をうけな  
いわけにはいかない。周知のように、一九八五年に、ゴルバチョフ氏が登場して、それまでの二十年の政治を「停滞の時代」と呼んで強く批判するとともに、新思考  
外交によって積極的に核軍縮のイニシアチブをとり、官  
僚的全体主義的な国内体制の徹底的な民主的変革に向け  
て、共産党を先頭にとりくみはじめた。その当時、教育  
界は激しい批判にさらされ、ソ連邦教育省は解体され  
て、教育委員会となり、教育科学アカデミーも、官僚的  
会員を排除し、真の学者の選出を迫る激しい論争が続け  
られるようになった。

就学年齢を七歳から六歳にしたのはペレストロイカ以  
前の学制改革であったが、ペレストロイカは、教育、保

育の内容のあり方についても、きびしい検討を迫るものともなった。

一九九〇年春に来日したモスクワの就学前教育研究所の副所長シ・パラモノワさんの指摘では、次のような欠点<sup>1)</sup>が指摘されていた。

「子どもに対する個別的態度が実践されていないし、保育者や施設指導者は権威主義的な仕事のやり方であり、課業や子どもの生活のさせ方を不適当な学校式の延長でやっている、また子ども的人格の尊重が足りない。さらに、子ども固有の積極性及び、人格形成にとつての子どもの自己発達の可能性の意義が事実上不当に低く評価されている。」

いうならば、ただ技能や知識を子どもに伝えるばかりで、子どもの創造的能力の開発、自立した積極的子どもの育成という面で、重大な欠陥をもっていたと述べている。

パラモノワ博士は、その解決のため、幼児教育施設の改善、保育者の給料の引きあげ、子どもの定員を一歳、

三歳は十名、三歳以上は十五名にすること、精神的、肉体的に子どもの健康を増進することを主張する。また、

教師は子ども的人格をよく知り、彼らとの交わり方を根本的に変える、つまり教育、保育を人間的なものにすること、また、個別指導と全面発達を保障するため保育学の成果を学び新しい実践を生み出すこと、幼稚園、保育園を開かれたものにし、家庭との新しい関係をつくり出すことなどのことを列挙している。

ところで、ペレストロイカと言われたソ連の社会変革のなかで重要なスローガンの一つは、ブルラリズム(複数意見の許容)と言われ、やがてそれは、複数政党制へと発展した。

それは就学前教育制度のなかでも複数意見、異なった見解を活発に生み出すことになっている。

### 三、「自由保育」理論の見方の変化

ソビエトの保育理論では、「自由保育」といわれる考えは、ブルジョアの理論で反対だとする意見を聞くこと

がしばしばだった。この場合の「自由」とは、無秩序、混乱、放任といった概念と同意語に用いられているように思われる。だから、カリキュラムや意図的な保育指導を一切しない「自由」な保育と考えられていた。ソビエトでは、一九三四年に幼稚園プログラムカリキュラムがつくられて以来、それにそった教育、保育ということになって、前述の児童学禁止などとなり、画一化の傾向を強めていた。

しかしペレストロイカ以後、「自由保育」概念の一面的な見方を改め、ロシア、ソビエトの幼児教育思想の客観的な流れが公然と研究発表され、当面する改革路線の理論を補完するものとなっている。

Ｌ・リトヴィン助教が、『就学前教育』誌（ロシア共和国教育省編、一九九一年六月号）に発表した「自由教育の理念」によれば、十月革命の以前から革命後の初期ソビエトにおいては、幼児教育界の主潮流は、「自由保育」の流れだった。雑誌『自由教育』の発行者Ｋ・ベンツェリ（一八五七～一九四七）は、理想的な幼稚園とは、「子どもの幸せ、喜び、完全な自由、そして調和の

とれた生活の場所」であり、そこでは保育者と子どもが「ともに対等な立場」であり、「子どもの数だけ保育の方法が必要だ」と主張していた。M・スペンティツカヤ（一八五五～一九三二）は、私立幼稚園を経営し、カリキュラムは作らず、絵を書かせることを主な教育とし、

保育計画は、保育者まかせだった。彼女の考えでは、園は、「子どもの社会的本能の発達」のためにあり、「集団的教育の要求」の手段によって未来の社会的人間を形成すると考えていた。彼女は、後になって、「理性的自由保育」という表現を用いるようになった。教育人民委員部（文部省）の就学前教育部長だったラズルキナ女史も、最初は「自由教育」の立場に立ち、「…大人がいつも干渉したり、余計な手助けをしたり、指図したりして子どもの自主性を弱めることは、教育上最大の罪の一つだ…」と述べていた。しかし二〇年代にはいって間もなく「自由教育」は新しいソビエトの方法とは両立しがたし、と当のラズルキナ女史も考えるようになる。すぐれた教育学者、P・ブロンスキーも、「自由保育は世界的

にも流行しているが、『教育的アナキズム』か、新しい時代の要求からの自由の告白か』と批駁するようになった。

モンテッソリのところで学んだE・チヘーエワ女史（二八六七、一九四三）は、感覚教育の基礎をきずいた人と今日もソ連保育学界に有名な人だが、『自由教育』の反対者だったと言われているが、その立場は、前記スベントイツカヤ女史に近いものがある。

前述のように一九六〇年代「雪どけ」の時代にザポロージェツやE・フレリナたち<sup>\*\*\*</sup>によって「感覚教育」に関する研究が、そしてその後L・ヴェンゲルらによって「発達診断」に関する研究が多く発表されたのは、二〇年代の研究が生き続けていたおかげだったといえよう。

リトヴィン助教授は、結論的に、「自由教育」システムと、今日自分たちが現実に持っている保育システムとは、対立する両極端ではない。明らかな矛盾があるとはいえ、共通する命題、一致する命題が多く存在する、と述べている。

#### 四、外国の理論、実践の研究

ペレストロイカ以前には、外国の幼児教育の紹介といえば、社会主義国の実践紹介が多かったが、今日では、そういったえりわけはなくなり、すぐれもの、興味あり役立つものを素直に紹介するようになってきている。その一つとして単行本『日本の幼稚園』（一九八八年、モスクワのプログレス社）があり、それは、やがて一年にわたって『就学前教育』誌に克明に連載されたが、内容は、東京保育問題研究会の生活指導部会の実践研究であった。また同誌一九九一年六月号には、松本市の鈴木鎮一氏の幼稚園について、V・フロルキン氏が三頁にわたって克明な報告を掲載している。

もちろん西独やアメリカについての紹介は盛んだが、デンマークの保育制度についても注目しているようだ。

#### 五、母親か幼稚園か

この文章が発表されるころには、『昨年九月』ということになるのだろうが、例のクーデター事件直後に十日



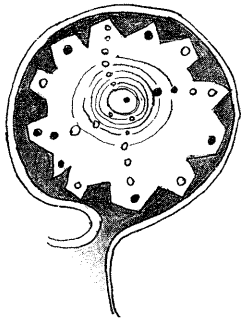
程筆者はモスクワを訪問した。ある晴れた日、もう少し肌寒さを感じさせるモスクワのアルバート街を散歩して、絵やマトリョーシカ人形など騒がしいまでのにぎわいを愉しみながら、新アルバート街の大きな本屋に立ちよってみた。入口の少し薄暗いところの地面に本を置いて売っている若者が、ただでさえ混みあっている入口の人通りを妨げている。ソ連では、本は良く売れる。もちろんマンガではなく、分厚い立派な小説や理論書である。もちろん流行のものだろうが、それを彼らは本屋さで定価で安く買うと、それを高い値段で売っているのである。ここに現代ソ連の矛盾と苦悩の一端を見た。市場経済への移行が物価の高騰を招き、こんなアルバイトでもしないと生活できない人々が増えているようだ。

この大きな本屋の二階に教育書の棚があることを知っていたので、私は、まっすぐそこへ向かった。そこで本の方から私の目にとびこんできたその題名が、L・ニキーチナ『母親が幼稚園か』である。定価三五カペイカ（旅行者用レートだと唯の二円にもならない安さだ）。A

5判で94頁のブックレットのようなものだが、結構読みではあった。サブタイトルは、幼稚園の保育者と両親のための本、とある。

ニキーチナ夫妻は「暮らしの手帖」社の招きで来日し、その独自の家庭教育で子どもたちを育てた話をして有名な人であり、以前からソ連でも注目されていた。著者は、奥さんの方だ。

「幼稚園は、両親のかわりになることはできないし、両親から子どもを引きはなしてはならず、両者を互いに結びあわせ、豊かで繊細な交流と相互作用が親子でできるようにすべきです。どうしたら、そうできるので



しよう。私は長い間この問題について苦しみました。思うに、幼稚園は、ママが母親になるように援助することが望ましい。しかし、そのためには、ただママの時間を、つくってやるだけでなく、大切なことは、彼女を母親の仕事の精神世界にひきいれ、その仕事に対する欲求を呼びおこし、発達させることです。」

長々とした引用は、本の裏表紙に書かれた著者のことばだ。著者は、幼児は家庭で育てるべきだと思い、社会的施設の幼稚園の教育に疑問をもっていた。しかし自分が母親となって過ごした時の記録や思い出、考えを本書で述べた一つの結論が、この引用でもある。いま彼女は、母親のような保育者のいる幼稚園、保育園が必要だと考えている。

乳児を保育園に入れるべきか、母親が保育すべきかの論争は、七〇年代のソ連で大きな問題になったが、その背景には、生活水準の向上があった。その結果、いわゆる育児休暇の充実がはかられ、一歳半までの産前産後休暇プラス一年間の育児休暇が有給で認められるように

なった。母性保護の精神からである。しかし、幼児教育の社会化は時代の流れであるから、前記のように園児数は増加を続けているといえよう。

今日のソ連で問われているのは、その保育の質の向上であることは言うまでもない。

## 六、目につく施設の改善

私が訪れたモスクワの幼稚園は、就学前教育研究所の実験幼稚園の一つで、ノボショーロワ心理学博士らが指導して、コンピューターによる遊びと教育が行われていた。技術的専門家と、心理、教育の学者、保育者が、幼児教育用のプログラムを作成し、研究、保育実践に用いるばかりでなく販売もしているようだった。グルジア共和国のトビリシ市の幼稚園でも立派なコンピューターのグループがあった。

「日本では、各家庭にあるでしょうから、園では備える必要はないでしょう」といって、その園長は笑っていた。

モスクワでも、トビリシでも園には室内の温水プールがあった。いまソ連の幼稚園はプールばかりだそうである。以前に見学した時には、遊戯室と寝室が各グループにあるだけだったが、各グループ毎にきちんとした食堂がついていることに気づいた。きっと全部ではあるまいと思った。それは、市場経済への移行にともない、地域や、共和国によって経済の差とか政策の違いによって保育施設の程度も違いができてきているだろうからだ。

トビリシ市では、すでに五つも私立の幼稚園ができていると聞いた。とはいえ、教師や保母の給料の安さが叫ばれ、一部ではストライキさえ行われたと聞いたのだが、幼稚園施設自体は、悪くはなっておらず、立派になっているようだ。

## むすび

クーデターの失敗は、連邦制をゆるがし、連邦構成の各共和国の主権を強化し、連邦は必要最低限の国防、外交などに中心がおかれる新しい連邦条約が結ばれようと

している。ソ連邦がどうなるか、それはまだ未知数である。しかし二億九千万の人々が住む社会は生き呼吸を続けている。その意味では、世界の幼児教育界に大きな影響を与えてきたソ連邦の幼児教育体制も、各構成共和国の独自性をより発揮し、画一主義をぬけ出して、脱イデオロギーを進め、過去の良きものを受けついで制度へと進んでいくためのエネルギーをもっていることは間違いないと思われる。

(本郷ロシア語文化研究会主宰)

\* 邦訳 『就学前教育』—ソ連の就学前教育要綱—(新読書社)

\*\* 『幼児教育について』(新読書社) 『集団主義と幼児教育』(明治図書) といった邦訳あり。

\*\*\* 『感覚教育入門』(新読書社)の著者の一人。

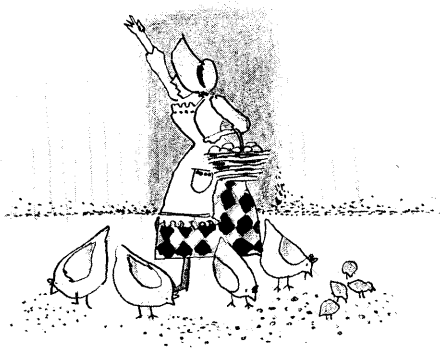
## 附属幼稚園の教育(11)

### 主体的に行動できるとは

村石 京

新教育要領の中には、幼稚園の教育は幼児の主体性を重んじることや、幼稚園の生活に於いては幼児が主体的に環境にかかわって生活する場であること等が述べてあります。附属幼稚園に於いても、園の生活は子どもたちが主体的に行動し、主体的に生活できるような場でありたいと考えて、日常の保育を進めております。

先ず幼稚園の一日の生活の展開について述べてみますと、幼稚園の一日は子どもたちと教師との朝の出会いから始まります。一人ひとりの子どもたちは朝登園したときは、夫々の所属する部屋の中途、母と子どもは一緒に来て朝の挨拶をします。そして子どもたちは手洗い、うがいをすませ、その後は自分たちの自由な活動に入るように



しています。級の担任は、母親から何か連絡事項があればそのとき聞くようにしています。教師は朝の挨拶を子ども一人ずつと交わすとき、出席の確認をする意味あいと、一日のはじまりとして、子どもと出合いのときの意味あいを合わせて、大切に受けとめるようにしています。そしてその後の時間には、出席をとるために集まるとか、朝の集会をするとかいったことは一切行っていない。

子どもたちは登園してから帰るまでずっと自分たちの時間を持ち、自分たちで友だちとともに生活し、自分たちで環境にかわりながらあそびをつくり出していくという生活が行われています。保育者は、子どもたちが自分たちで考えたことや、興味のあること、好きなことが、充分行えるような時間と環境をつくっていきたいと考え、努めています。

「主体性をもって行動し、自分で考えたり、創造したりできる子ども」「友だちとともに喜び、楽しみ、悲しみ、友だちと共感できる子ども」こういったことが教育の目標であり、ねらいとしているところなのであります。そのためには園の生活は子ども自身のものであり、自分たちで遊びをつくり出しながら生活し、その中で子どもは保育者の支えを受けて育っていくという考え方を持っています。

そして遊びの中には、様々な発達の可能性が含まれていることを思い、その可能性を伸ばし、その子ども一人ひとりに合わせた発達が進められるようにと、助言をしたり、援助をしたり、ともに遊んだりしながら、指導というものを行っていません。

子ども自身の自発的なもの、能動的なものを大切にし、それを引き出し、より伸ばしていくとい

うことが保育における姿勢であります。つまり、教師が子どもの前面に立って子どもの行動を規定したり、促したりすることはしないで、いつも園の中では子どもが中心であり、子どもが主体になって行動していくことを基本として保育を行っています。

このことは入園当初から、そして三歳児も四歳児も五歳児も、園で生活するものはみな同じように幼児中心の生活をしているので、はじめの頃は新しい環境での不安と緊張から自分からは動けないでいる子どもたちもいますが、次第に自分を出し、自分から行動するように育っていきます。そして幼稚園に行ったら自分の好きなことをして友だちと遊べるという気持ちは喜びとなり、喜んで登園するようになります。五歳児などでは、今日は幼稚園に行ったら誰々とこれをして遊ぼうという目的を持って来る子どもも多く見られます。そ

して朝から考えてきたことを友だちと生き生きと話し合いながら進めたり、熱中して遊びに取り組んでいく様子も見られます。教師は、子どもたちの遊びがうまく進められるように、そして考えたことが実現できるように援助したり、必要な場や材料を一緒になって工夫したりしていきます。

勿論はじめは自分からは行動できなかったり、あるいはまわりのことに関係なく自分本意な行動をとる子どももいます。しかし教師の適切な言葉かけや、愛情を持った見守りを受けながら次第に気持ちが安定し、教師への信頼もできてくるともに、一方では園生活のリズムが身につくにつれて、段々自分自身を素直な形で現したり、行動したりできるようにもなってきます。そしてはじめは自分だけの世界であった子どもが、自分と教師、自分と友だちという他の人の存在にも気づき、共に行動することを喜びとするようになりま

す。

「主体的に行動できる」とは、自分自身で考えて行動していくことですが、その根底には次のことが備わっていることが大切となります。「自分のおかれている状況がわかってくる。まわりの様子が理解できる。そしてそれに合わせて行動することがができる。自分の意志で判断したり、行動したりしていくことができる。」これらのことは内容としては、三歳児、四歳児、五歳児と夫々の年齢に合わせて、段階をふんでいくことが大切であることは言うまでもありません。

指導する側として重要なことは、毎日の生活の中で築き上げていくことが大切なことは勿論であります。子どもへのかかわり方や配慮のあり方を、年齢や時期、そして一人ひとりの個に応じた成長に合わせてながら対応していくことも大きな意味を持っています。このことが適切に行われな

と、子どもの主体性はよく育ってはいかないと思います。幼児期は人間形成の大切な基礎となる時期ですが、この時に教師がいつも先へ先へと指導をしていくなら、子どもは必然的に受け身となり、依存的となっていくます。あるいはまた、いつも入園当初と同じような扱いをしたり、過度に手をかけているならば、子どもの中に芽生える自分でやろうという気持ちは凋んでしまったり、失敗や困難にあってもくじけない強い心などが育っていかないかもしれません。

更にまた、子どもが年齢なりに自分の立場がわかり、自分の意志で行動できるということは、自己の中に物事に対する判断力が備わってきたことにもなります。これが人間としての自立です。人に言われたからするのではなく、成長に合わせて自分自身で考え、判断し、行動していくように育ってほしいとのぞんでいます。

また自分の立場がわかって状況に応じて行動できるといふことは、裏返せば相手のことも見えてくるといふことです。相手のことがわかることによって、何かを行うときにも自己中心的な言動に偏ることなく、相手を思って行動できるようになります。

主体的に行動できることは、園の生活の中で自分自身で考えて遊んだり、活動したり、判断したりしていくことですが、その中に円満な人とのかわりが大きな要素となっていることは言うまでもありません。相手を思いやる気持ち、友だちの立場や心がわかる人間としての優しさなどを、幼稚園生活の中で友だちとの遊びを行っている間に、充分根づかせ、育てていきたいものと思います。更にまた、自分自身で自己をコントロールし

ていく力や、生活面での自立なども次第に蓄積されてこそ、全ての意味で主体的に行動できるといえるのだと思います。

そのためには園の生活は幼児にとって、教師や友だちとの愛情や信頼関係に支えられたものであることが大切です。そして友だちと充分にかかわりながら生活を楽しむことが出来ることと、一人ひとりの子どもにとって、自分の興味や関心に基づいた活動ができることが保障されてこそ、意味深いものになるのだと思います。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)



# 遊びのスクランブル交差点

## おみせやさんごっこ(1)

仲 明子

### ◇ 遊びのスクランブル交差点

おみせやさんごっこ、それは、昨冬我が家の六畳で、毎日毎日繰り返し遊ばれた遊びである。

おやつを終えて、つぎつぎにやって来た子どもたちは、各々が思い思いにみせを出す。多いときは六人の子どもが一部屋に集まり、五時までの二時間ほどを、ほとんどけんかをすることもなく遊ぶ。それは、冬の間の三か月ほとんど毎日のように続けられた。

彼らは、外遊びのできる春・夏・秋の多くの時間を近くの神社の境内で過ごす。

おにごっこ ドッジボール 大なわ だるまさんがころんだなどのような遊びをするときは大勢で一緒に。他は互いの姿を視野に入れながら、その日の気分で数人ずつに分かれて——LはT・Yらと、NはCと、Oは他の女友達と、そして、ときにNやCと、ときにLと——。

それは、木登りだったり すもう なわとび ボール遊び 砂遊び 自転車乗りだったりする。

真冬になり、内遊びを余儀なくされた彼らは、LとNの我が家の兄妹の各々の取り持つ縁で、ある日たまたま我が家の六畳で出会った。その様子は、私の目には、異なった方向から来た人々が、たまたまスクランブル交差点で出会ったときのように思われた。

そのときの私には、年齢や男女の違い(※1)、遊びの好みや今までの体験(※2)、そして、互いのなじみの深さ(※3)も違う彼らが、一つの狭い部屋で過ごせるとは思えなかった。

それが、一つの遊び——おみせやさんごっこ——を楽しめるようになっていたことには驚かされた。また、そんな遊びがあったことに、本当にホッとしたものだった。

三か月もの間、我が家の六畳という遊びのスクランブル交差点に、彼らをひきとどめ続けた「おみせやさんごっこ」のどこに、それを可能にした魅力が隠されているのだろうか。それを様々な視点から探してみたいと思う。

#### ◇ おみせやさんごっこの始まり

夏の終わりから秋にかけて、NとCは、兄や姉の登園した後の午前中を、庭にごさを敷いてままごとをして過ごすことが多かった。それは、午後になってCの姉のOが加わると、レストランにかわる。

お客に狩り出された私を含めた四人のやりとりを横目に、L、T、Yは、庭の砂場で泥んこに、室内でブロックをと、ときに居合わせても別の遊びをしていた。

ある日、私は彼らをレストランのお客になるよう誘った。そして、彼らはこの遊びに合流することになった。それはお客になるのではなく、自分たちもおみせを出すという形で。

なぜ、彼らはお客になるのではなく、おみせやさんになることにしたのだろうか。

それが、どんなおみせやさんごっこなのかをみることで考えてみることにしよう。

(i) まず テーブル

NとCがレストランを始めて、それが広がっている。おやつを終えてやって来たOとTは部屋に入り、それを見て、

O Oちゃん 今日はいきれやさん。Lちゃん テーブル貸して。

きれの入った箱を持って来て、テーブルの上に配色よく並べ始める。

T ぼくちゃん 今日はおもちゃやおばちゃんテーブル 貸して。

おもちゃの入っている箱をいくつも持って来て、テーブルの上に無造作に山積みする。

L ぼくほんやさんになろう。おかあさん テーブル。

本箱からつきつきに本を運んで来て、テーブルの上に並べる。

このように、毎日のようにおみせやさんごっこをするようになって、子どもたちが部屋に入ってきて、まず、口にするのは、今日、自分がどんなおみせになるかであった。それは、自分は〇〇やになるから、他は別のおみせになるように、というけん制でもあろう。

そして、子どもたちの口からは、つきつきにおみせの名が発せられる。おもちゃやほんやぬいぐるみやレゴやきれやおりがみやのりものやくすりやくじやレストラン。

これらの各々は、これまで六畳で遊ばれてきたおもちゃのあれこれ——おもちゃ置き場では、各々を一まともりにして、種類ごとに箱やカゴに入れられてある——の名でもある。

すると、「おみせやさんになる」とは、自分の好きなおもちゃを一種類選んで、それをその日一日所有するにとでも言えようか。

つきに子どもたちが言うのは、「テーブル 貸して」である。

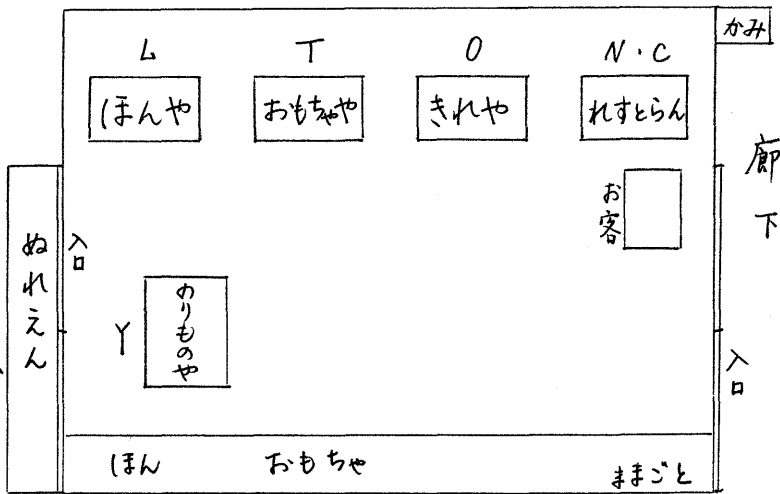
六畳にあるのは、LとNのための折りたたまれた二つだけである。私は、始まりの頃、求められるままに、別の部屋にしまっておいたテーブルを探し出して来ては、つぎつぎに貸していった。すると、結果として、多い日には、三つものテーブルを貸したことになった。

テーブルをもらった子どもたちは、おみせを出す場所を決めてテーブルの脚を広げる。そして、つぎつぎにおもちゃを運ぶ。たちまち六畳はおもちゃでいっぱいになる。そして、おもちゃ置き場はからっぽとなる。

このように、まず、限られたおもちゃを分け合い、つぎに、六畳という狭い空間をテーブル一つ分ずつ分け合うことで、一つの遊び——おみせやさんごっこ——は、始まった。

それは、互いをこの遊びのメンバーとして認め合ったしるしとも言えよう。

そして、幼いNとCも、この部屋になじみの薄いOも、テーブルの助けを借りて、自分のなわばり——遊びの安心基地——を持つことができた。そのことで、彼ら



ある日の六畳

は、この部屋にいごちの良さを感じたことだろう。そして、より積極的にこの遊びに加わることができることだろう。

(ii) つぎに お金を分ける

Yが来る。部屋に入るなり

Y えーと お金はどこだ。

きよろきよろとお金の入っているカンを探す。まだ誰のものにもならず、ままごとの棚の下の段にしまわれているのを見つけホッとす。自分のものにしようとカンごとつかむ。

みんな一斉に ずるーい。

T みんなで分けようぜ。

みんな、おみせをほうり出して集まって来る。カンを逆さにして色とりどりの硬貨と千円、一万円札が畳にばらまかれる。早速、ジャンケンで山分けが始まる。それはみんなで納得がいくまで続けられる。そして、つぎには

財布の入っている箱を出して来て、各々がお気に入りの財布を選び合い、お金を入れる。おみせづくりは再開される。

この様子を見ていた私は、お金が一瞬にして、その場を支配し、みんなを一つに結びつけた力に驚かされた。

私は、その後、何度もこのような場面に出会った。それは、誰かがカンに手をかけお金への関心を示すことで、突然やって来る。どんな遊びもお金への関心にはかわらない。今までの遊びは一瞬にして中断し、みんなでお金の山分けが始まるのである。

他の子が持つのなら自分も持たずにはいられない「お金」。それは、今、何かを買いたいから持ちたいのではない。それが「お金」だから持っていたいのである。みんなと同じように持っていることで安心なのである。

いろいろな遊びへの様々な関心を超えて、子どもたちは「お金」には特別の関心を持っている。それはみんなに共通するものである。

すると、このおみせやさんごっこへみんなを導いたものの一つは、お金であり、それを自分で持って離したくないYであったことに気づかされる。

誰にも共通する関心のあるお金。それを分かち合い、互いに持っていること、それは、この遊びのメンバーであることを認め合ったしるしと言えよう。

それがTとOのように、互いになじみの薄い相手であっても、お金を共有している——共通の関心であることを確認し、さらに分け合った——ことで、互いに仲間意識を感じ始めていることであろう。

(iii) そして 看板を二つ

NとCが半裁の紙と鉛筆を持ってやって来る。

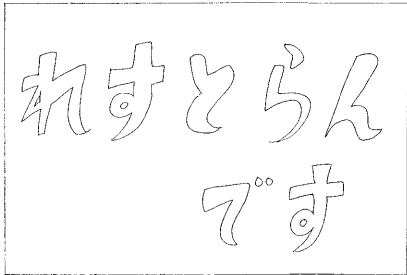
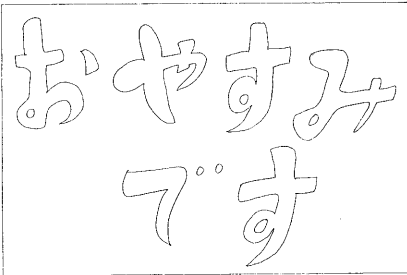
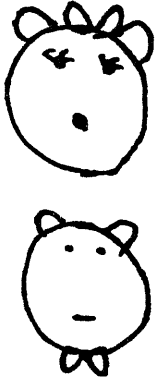
C おばちゃん 「れすとらんです」と書いて。

私 はいはい 「れすとらんです」とはい。

N おかあさん 「おやすみです」と書いて。

私 はいはい 「おやすみです」とこれでいい？

C がセロファンテープでテーブルに紙をはる。N がその上に重ねてはる。今、こちらからは「おやすみです」が見える。



テーブルを広げ自分のおみせのスペースを確保した子どもたちは、つぎに、そのテーブルに看板とも言えるような二枚のはり紙をした。一枚には自分のおみせの名が、もう一枚には「おやすみです」が書かれてある。

私は、まだ字が書けない子どもたちのために、求められるままに多くの看板を書いた。彼らはその一字一字に思い思いの色をぬることで、きれいな看板をつくった。他の子どもたちも、この遊びの中で初めての製作ともいえる看板づくりを楽しんでいた。

その中から六畳のおみせに共通する「看板」ができ上がっていった。それは、冬の三か月の間、いや、現在に至るまで工夫を加えながらひき継がれている。

その二枚の看板は、その日の遊びの終わりには、子どもたちによって大事そうにはがされて、おもちゃ置き場の台にはられ、つぎのために残された。

私は、この看板づくりがみんなに広まっていった、結果としておみせの共通するしるしとなっていったとき、六畳に展開するこの遊びのイメージが、また一つみんな



「れすとらん もう あいてるよ。  
これは、おまけにあげるんだよ。」

に共有されたように思われた。

そして、六畳が全体として一つの遊びをしているらしく思われた。

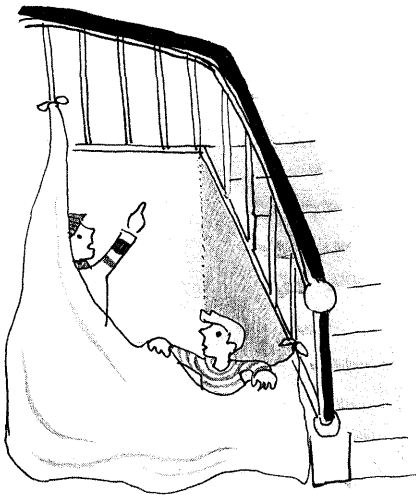
このように、レストランごっこから広がったおみせやさんごっこは、六畳に集まって来た子どもたちが、みんなで生み出していった遊びであると思う。

ここでは、彼らはみんなで遊べる遊びとして、幼いNとCの遊んでいたレストランごっこを取り入れた。そして、レストラン（ままごと）のお客になることに興味のない男の子たちは、レストラン（おみせ）に隣り合って別のおみせを出すことに共通の興味をみつけることができた。

こうして、おみせをつくることから始まったおみせやさんごっこは、早速、共有する「おみせの型」を持った。——テーブルを店舗にして、そこにおもちゃを並べ、お金を分け合い、看板をつくる——それらは、おそらく各々がどこかで遊んだことのあるおみせやさんごっ

この一部であろうし、各々の持っている本物のおみせのイメージなのであろう。

しかし、それを六畳に持ち込んでみんなの前に表現し、伝え、まわりがそれをつぎつぎに採り入れていった





ことで、みんなが共有する「おみせの型」——おみせやさんごっここの遊びのイメージ——ができて上がっていった。

一つの遊びのイメージを共有すること、それはその遊びのメンバーであることを互いに認め合ったしるしでもある。

そして、メンバーと認め合った一人一人には仲間意識が生まれ、部屋全体からは一つのことをしている一体感が感じられる。その中にあるは、なじみの深さや年齢の違いを超えて、誰もが安心感を持って遊ぶことができるよう。

私は、この遊びが、ごく初期に遊びのイメージを共有することができたことで、これから先も遊び続けられることが可能になったのだと思う。

(舞々同人)

## 註

※1 LとTとYは男児、Oは女児、共に五歳児。NとCは女

児、三歳児。

※2 LとTは一年間の外保育中心の自主保育を経て一年保育の川崎市立幼稚園児。

YとOは二年保育の私立幼稚園児。

家庭では、LとYは異性の妹(N)、姉と、TとOは同性の兄、妹(C)と遊んで育った。

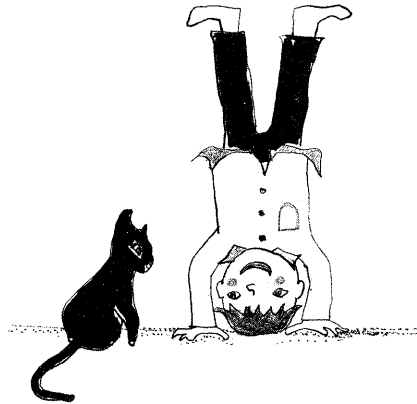
※3 LとTとYはこの三年半の間、ほとんど毎日のように遊んできた。

NとCは夏に知り合い、それから五か月の間、毎日のように遊び続けてこの冬をむかえた。

TとO(妹のCはさらに)のなじみは薄い。幼稚園も違い、互いに、女児同士、男子同士の遊びに身近にふれる機会も少ない。二人が同室でこのように遊ぶのはほとんど初めて。互いを知るのもこの遊びを通してである。

# 手紙

松井 とし



県の行政改革のあおりを受け、幼稚園が廃園されることになった。「廃園」の足音がはっきりと聞こえ始めた昨年、修了生から来た年賀状に出す返事の中でその事に触れた。ただ一人中学生のI子から折り返し手紙が届いた。「なぜなのか、うさぎたちや先生たちはどうなるか」と書いてあった。私は報道された新聞の切り抜きを同封し、「疑問に思うことをうやむやにせずに、追究する姿勢はとても大切だと思う。また、心配してくれたことがとても嬉しかった」と返事を送った。

現代社会を生きる日々、おかしいと思うことや、納得のいかないことに数多く出会う。環境破壊に反対する住民運動も、その第一歩は素朴な疑問や小さな行為から始まるのだろ

う。しかし、今の私にはそのエネルギーがない。そればかりか手紙を書くことさえ重荷になって親しい人たちとも疎遠になりつつある。I子の手紙によって、慌しさに流されて生きる私の生きざまを反省させられた。

I子には、年少児だったころにも大切なことを教えられた記憶がある。秋も深まったある日、I子は一人空箱製作に熱中していた。しばらくして「噴水を作りたい」と砂場にした私を呼びに来た。部屋へ戻ると、アイスクリームの丸い容器の中に水の出るところがつけてある。噴き上げる美しい水の動きをどうやって表すか、一緒にあれこれ考えたのち私はモールを取り出した。I子は喜び「先生、今日っていい日だね」と弾んだ声で言った。登園の途中、坂の上から真白く大きな富士山が見えたとし、噴水も出来たからだと言う。このひとは、自然を友に充実感をもって生きる幸せを私に気づかせてくれたのだった。いよいよ幼稚園は、この三月で四十一年の歴史を閉じる。今年の年賀状では、多くの修了生や父母からメッセージが届いた。「楽しかった日々幼稚園で学んだことは、いつまでも心の中に残ります」この言葉は私の心の中で深い共感をもってくださる。

幼い人たちによって人間性を磨かれた私の十五年間は、かけがえのない宝ものとして残っている。

(神奈川県立教育センター)

〈随想〉

なれ

村田 修子

“なれ(ず)

・ なれ(たり)

・ なれる

なれる(とき)

・ なれ(ば)

・ なれ(よ)”

私は原稿を書くことに余りなれていないからかも知れないが、何か書くときはともその書き出しにこだわらる。そこがうまくいくと案外すらりといくのだが、それだけにこれを考えているときが案外長い。自分でも“余りこだわらないでもいいのに……”と思いつながらこだわらる。これもなればなんでもなくなるのかも……。

「なれる」ということはいろいろな面で子どもとも関係あることなので、なれる、なれる……といっているうちに、生徒の頃習った活用形を思い出した。たしかに色々な状況がこの中に全部含まれているのだ。なるほど、(当たり前のこと……)

また「馴れる」「慣れる」と漢字を考えてみる。

○きつと馬は水を好まないが、ときがたつてなれてくる  
と川にもこわがらずに入るようになるというのかし  
ら、と思ったり、

○習慣のようにいつもいつも経験しているとできるよう  
になる、ということなのかしら、  
等と勝手な意味あいを考えてみた。そこで辞書をひいて  
みる。

馴れる（親しみなつく。珍しくなくなる。）

慣れる（習慣になる。習熟する。）

とあったのでまんざら見当違いでもなかった。と自己満  
足し、そこから思いはどんどん広がって、「それにして  
も今の学生さんは、気にして辞引きでたしかめることは  
しないだろうな」と思いながら、いつも提出される実習  
の記録の中に、直さずにはいられない誤字、感心してし  
まうような当て字を思い出した。私の覚えていた字に不  
安を感じて辞書を手にさせられて、にが笑いすることの  
多い昨今なのである。文章を書くことに一生懸命で余り  
考えずに「慣れた字」を書いてしまいうらしい。

さて、今年も幼稚園界の話題の焦点は、「新教育要  
領」に関することだと思ふ。

「教育要領」は一番土台になることなので、それが改  
訂されたというときだから当然なこととは思ふ。今私が  
経験した三回の改訂を振り返ってみれば、それぞれ違っ  
た感触であった。

先ず、昭和二十二年に「保育要領」が出されたとき  
は、私は全然何も知らずに幼児教育の世界に入ったばか  
りのときであった。それ迄は余り関心はなく、いとこ達  
が幼稚園に行っていたのを見にいった感じとか、どうい  
うことをした、という話から、私なりに「幼稚園とはこ  
ういうところらしい」と思っただけだ。

印象としては

○学校のように何でもきちんとみんなと同じようにや  
る。

○先生の言う通りに子どもがやっている。

○壁に同じ作品がぎっしりと貼られている。

幼稚園の経験を持たない私は、これ以外の姿というものは考えたことも無かった。でもさすがにみんなで机に向かって恩物をしている姿は見たことはなかったが、織紙などの製作物を古い箱の中から見つけたことがあるので、半世紀ほど前はこういう内容が専らであったのだろうと思った。

それが第二次世界大戦のあと、アメリカのG H Qの指導で出された保育内容は御存知のように十二項目

1. 見学
2. リズム
3. 休息
4. 自由遊び
5. 音楽
6. お話
7. 絵画
8. 製作
9. 自然観察
10. ごっこ遊び・劇遊び・人形芝居
11. 健康保育
12. 年中行事

勿論我が国の保育も、これ等のことどもは考えてやられていることは分かるのだが、これを見て私は「日本の幼児教育が普通の生活の中に入ってきて、身近なものになったし、小手先でやられていた姿から新しい感覚の、いなれば、はいからで明るい感じになった。」と思っ

た。

余りに中味ずばりの表現に、先生たちはめんくらったようではあるが、すらすらと理解されたような気がする。

そしてそのときの先生方は、全くすなおに、その変わり様についてゆくべく目を丸くし話を聞き、目を大きくして話し合いをし、次には目を輝やかして前進し、徐々に子どもの中におろしていった。

本当にそれでよかった、という感じであった。何故なら指導の立場にあったアメリカのその人達の口からは「先ず子どものために」子どもが好きなことを先ず第一に考える……、それが幼児の教育である」ということをことばではっきりと言われたからである。子どもの幸福のために、ということが一番基本になっているのだ、という日本の教育界では余り気軽に聞くことが少なかったことを耳にして、新任の私にもよく分かったし、新鮮に映ったのはたしかである。

先生達も安定感を持ったようであったし、それに付れて子ども達の活動する姿も以前とは違って大きくのびの

びとしてきた。よそゆきではない本来の子どもの姿を見聞きするようになってきた。それに依り私も子どものことを色々な角度から考えることが必要なのだ、ということが分かってきた。

このときの改訂は、「保育内容」の変わりようが一番印象にあるのだが、次の昭和三十一年（試案）・昭和三十一年の改訂のときは、前の保育内容の考え方になれてしまっていた人達は、六つの領域にまとめられたことに戸惑いをかくせなかった。「この活動は一体どこに属するのだろうか？」等々、割合いに意味を持たないことが論議されることが多い状況であったように思う。

私は二回とも幸いなことにそれに深くかわられた倉橋惣三先生、坂元彦太郎先生がそばに居て下さって、直接そのまっすぐなお話を聞かせて頂くことが出来た。遊びに「伝言ゲーム」というのがあるが、人から人へと伝わっていく間に、聞いた人の経験や思い等が加えられて思いがけない方向にいつてしまうことを遊びの要素としているが、改訂時も全くその通りで、伝えられていくに

つれて驚く程真意から離れていつてしまう。見当違いもはなはだしいことがやられてびっくりさせられることも多かった。

その時に持たれた説明の会などでの話を素直に聞けば、本意は受け取れるのではないかと思ったものがあったが、単純な私などは全く驚くような解釈が出たりして、火花を散らすような論争もよく耳にした。

だから二十二年の改訂のときには殊更に思わなかった。「静かできて張りつめた空気」をあとになって思い起した。考えてみるとこのときは幼稚園界だけではなく、総てのことが前と違った新しいひとに切りかわったときだから、論じ合ったりする余裕もなくなかったのには違いないし、後者は、今迄の安定した「なれ」の状況をはなしたくないという新しいものに対する人間本来の反応もあるかも知れない。

そういう経緯をへて、今私にとっては三度目の教育要領の改訂を経験した。

これもお茶の水女子大学の学長でいらっしやる河野重

男先生が中心になって事を運んで下さったので、お目に掛ったときに「基本的には倉橋先生の理論をもとに……」とお話し下さったことはとても有難いことであつたし、改めて幸せに感じたことである。

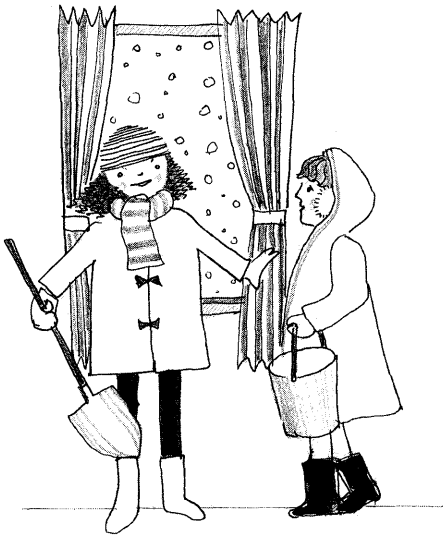
けれども今回もまたまた、幼稚園の現場ではむずかしく考えて混乱が起こっているようである。

世の中では五日制が論議され、既に実施されている会社等も多い。「だから（そこからが、おもしろい）今度は五領域になったのだ、……。」というに至っては「ナンノー？」というほかはない。一日に一領域ずつやろう、とでもいうのか、そこにはひとつも子どもが存在していない話である。

昭和二十二年の頃、「子どものことが先ず第一で、子どもが幸せに……」というのを聞いて私、がやっと分かった、という時代とは違って、福祉の関係やその他の事でも今は「子どもの幸せを指して……」という種類のことばはよく耳にする時代である。それが子どもにも関係する仕事をしている者が、子どもを不在にしておいて、園

のやり方のことを考えても何の意味もないのに、と思う。

「また毎日の保育にしても、「子どもがやるのを見ていればよい」ということで、先生はただ立って見ている様





子に変わってきている、というのである。子どもがやっていることに手を出したり口をはさんだりして指導はしないのだという。指導してはいけないのだ、ということも耳にした。それなら先生の養成校など必要ではなくなる。子育ての経験のあるおばさんで十二分に事足りてしまふ。

「指導」というのは幼児にとっては一寸固くてそぐわない感じがするので、使いたくない人は使わなくてもよいけれども、様々なことを経験させるとそれは本物として身につく、ということからすると、経験の少ない子どもにも経験の多い大人が真剣に相手になって上げて、よりよい方向にむかわせる、これは絶対に必要なことである。字句にこだわらないことも大切である。

また、「自由保育」はよくて、「一斉保育」はだめ、というらしい。ここで「自由保育」というのはどういうことなのか、と改めて問われると多分誰もが答えに困ると思う。倉橋惣三先生がこの言い出し人のように思っている人も多いようだが、先生は一度もそういうことをおっ

しゃったことはないし、書かれたものの中にも「自由保育」ということは無い。「子どもの自由な活動を尊重する保育」という意味のことをおっしゃってはいられるが、それが今よくやられる言葉の省略のようにひつつめられて「自由保育」となり、それぞれの解釈の仕方によって使われているのである。だから定義というものはっきりとしていないが、これがあたかも倉橋先生の理論を代表するかのようにならされているのは、それを知っている者達としては、誠に遺憾なことなのである。ここでも子ども不在の考えである。子どもが自分で考え、すすんで精いっぱい活動するならば、子どもはいちばん幸せで且つ有意義な過ごし方なのである。そのためにはどういう形の導き方がよいのか、ということでは

○ひとりひとりとかわる

○グループでかわる

○みんなで共通の経験が持てるようにかかわる。

そのやりたいことによって、これ等のかかわり方が打ち出されてくるのであって、保育のやり方が先行するの

ではないのだが、とかく形の方が優先して考えられることが多いのが現実であるから、「一斉保育」はだめで、「自由保育」は何をしてよいか分からないけれど、子どもがやるのにまかせるその保育がよい、ということになってしまう。

或る会で、「自由保育」だの「一斉保育」ということばを使わないで、なんとかしてこれをなくしたい、と思っている先生のお話を聞いたことがあるが、全く同感である。この頃では、入園希望の親が参観にきたときに「こちらは自由保育をしていらっしやると聞いていますか……」とくる。その人が「自由保育」というのをどのように理解しているのか分からなくては話のもっていきようもないので、意地悪をするつもりはないが、それはどういふことなのか聞いてみる。すると多くは「朝きたら子ども達は帰るまでやりたいことをしてそれで帰るのだそうですね。」という返事である。「みんなで楽しく紙芝居をみるときも、みんなで誕生会に参加することもあ

したような顔付きになる人が殆どである。

真意は入園してから分かってもらうように考えることにして、ひとまず話は打ち切るが、よく分からないのに専門的な用語をむやみに使ってくることも多い。

ここでも“なれ”による安易な思考が感じられる。

子どもが入園して、仲々なれない状態であるのを、いろいろな手段で心持ちをほぐすように計らい、なれてくれば、一人一人の子どもが持っている個性に合うように手だてを考えながらふれ合っていく。そこにはなれた先生の力が何といっても必要なのである。子どもを大事に思い、また教師を信頼する子どもとのふれ合いが何にも増して大切で、お互いになれなければいけない。けれどまた、なれすぎても困る事柄もある。

私は長年混み合う電車にのりつけなかったのに、通う先が変わって、東京でも一番という朝の混雑の電車に乗るようになった。とても奇妙に感じたのは、ぎゅうぎゅう押されて、近くの人達と体がくっついてしまったと

き、鳥肌が立っているのか、くすぐったいような感じを覚えることであつた。普通であつたら考えられないような、例えばふくらはぎが隣の人の足にくっついったり、呼吸しているのを感じたり、立ったまま居ねむりをする人のガクンという膝のゆるみを味わつたりする。自分でも押されている格好を想像してみるとおかしいのだが、どうにも出来ずに耐えつつ目的地で押し出されておる。

そういったビリビリという皮膚での妙な感覚が半年もたった頃消えてしまった。「あつ、こういうことになれてしまったのだ」と思っているが、「なれることの必要さ」と同時に、「なれて感じなくなるこわさ」もあると思つている。

幼稚園で子どもに接するときにも、気にしなければならぬ「なれ」である。

あの下一段活用のどれもが、子どもの姿を思い浮かべさせてくれる。

○もう一か月たったのに○○ちゃんまだなれない。

○○○ちゃんはやつと男の子にもなれてこわがらなく

なって、今日は手をつないで帰つたわ。

○朝きたら先ず手を洗つてうがいをするこゝになれてきた。

○友達と遊ぶことになれてくれば園の生活がもっと楽しくなるし、もっといろいろの経験ができるようになる。

○「早くなれなさい!!」という命令は好ましくないけれど……。

いろいろな場面の姿が思い出せて楽しい。

もっと違うことばを活用させてみて楽しもうと思う。

(洗足学園短期大学・同附属幼稚園)

## 笑い葉

モーレンキャンプふゆこ

箸が転がってもおかしい年頃というものがある。しかし私は当年四十七歳。一見陰気でもやせっぽちで劣等感にうちのめされたような風貌だったくせに、今だに箸が転がってもおかしいのである。

少女時代は悲しかった。家は嫌なことばかりなので、学校では一日中笑っていた。澄子さんという、あまり友だちのいない、しかし実によく笑う女の子と、いつも一緒だった。劇を見ている最中、登場人物のバンドがバンソウコウに見えると言って笑うのである。笑いだすと止まらない。下校後は彼女の部屋にこもって物真似をする。あの猫背の級長がマインボを踊ったらどうなるか。踊り出すと話が思わぬ方に展開する。卒業後ずうつと後に、

彼女が韓国人だったということを知って、びっくりした。彼女のお父さんもお母さんも、口数は少なかったが流暢な日本語を話したし、彼女自身もそれらしい事は一言も言わなかった。しかしお兄さんが就職せずいつも家にいたことや、ほったの落ちそうなおいしいビーマンのお煮つけなどをごちそうになったことなどを考え合わせて、そうかもしれないと思う。こうして私自身異国で子供を育てるはめになって、時々彼女のことをなつかしく思い出す。彼女を思う時今だに切なく思うのは、彼女が韓国人だったということではなくて、私がそれに全然気がつかなかった、ということだ。彼女たちに異質なものを感じなかった。こうして人種のるつぼのような小国に身を寄せてみて、つくづくと哀しい日本ではある。

高校時代おもしろい歴史の先生がいた。一時間お腹をケイレンさせっぱなし、というのだから大変な天才である。彼が空をみつめて一瞬沈黙するその「間」がたまらない。

「野武士というのはですねえすこかったらしいですワ。ひとすじなわどころではないですヨ。残酷も残酷、土の中に体を埋めてですねえ首をのこぎりできいぎいやられても、ちっとも死ななんですな。(そしてふき出しそうなのをこらえながら)そこで私達は次の言葉が爆笑をさそうのを知るのだが)死んでもですねえ、まあんだ生きとるですワ。」(笑)

「戦争が終わり頃になると、何もなかったですねえ。竹やりの竹もなくなって、みんな爪をのばせよ、と言った。アメリカ軍が上陸したら顔をひっかけ、ゆうてですね。」

…：来ましたね、ついに、アメリカ軍。(一瞬間<sup>※</sup>をおいて) 原子爆弾ちゅうのもって「お腹をよじらせて笑っているうちに涙がこみ上げてきて、とうとう私はこの人に初恋をしてしまうことになる。」

異国に住んで一番つらかったのは、笑えなかったということだ。日本人のひとりも居ない田舎で十二年、二児を育てた。それが忘れもしないあの日、仲良しのマリータさん夫婦とネレケさん夫婦と誕生パーティーをしていた時だ。私はふと、「ねえインスピレーションというゲームをしてみない？」と言ってみた。このゲームは学生時代女友だちとこたつに入っていたゲームで、郷愁にさいなまれる私にとっては幸福のシンボルのようなゲームだった。二組みに別れて一方が題を出す。他方はその題に対するインスピレーションを書き、誰が書いたかをあてるのである。夫側と妻側に別れて真剣な題が出た。「サラリー」と夫組が出す。「子ども」と妻側。「セックス」と夫組、「幸福」と妻側。私はブロウクンのオランダ語を書いてマリータさんにわたすと彼女が直して発表してくれる。夫組から「女性解放」という題が出たときである。マリータさんは真剣な顔をつくらって、自分のをまずこうよみあげたのである。「O<sup>オ</sup>(感嘆詞、あら、という意味) O、O、O、O、O、O、O」彼女はこのオーオーとの間に間を置き、一字ずつ抑揚をつけて「OノOノOノOノOノOノOノOノ」とよんだのである。部屋は爆笑。私はもうおかしくて椅子から転げ落ちて笑った。この時突然私の囲りをぐるっととりまいていた目にみえない頑丈な壁が一部

裂けて、そこから涼しい風がふつと額を吹いたように思えた。

そうだ、あれからずい分暮らしやすくなった。マリータ家は、やっと十年待って生まれた赤ちゃんが八か月で心臓の手術の失敗で死んでしまっ、いつも重苦しい空気につつまれていたのだが、二度目に懐妊したという報が入って、私達はすぐお祝いに行った。彼女のぞうきんの大きな穴をみて、「あら、この穴、ぞうきんより大きい」と私が言えば、「もつとあるよ」と彼女は穴のあいたタオルや、穴で指なんかなくなってしまうたくつ下や、はてさてばっくりあいたくつままで出してきて、二人で台所のゆかにうずくまって笑った。あれからマリータさんは三人子を産んだ。「三人目」と名づけた子は、ダウン症の子だった。病院にかけつけた私の首に、大きなマリータさんがすがって「助けて」と息をつまらせた。私はとっさに、「今（次女の）シリーケちゃんに会って来たわよ。『フェユコ』って上手に発音したわ」と言うと彼女はすぐ顔をほころばせて、「ほんと？　そうでしょ。上手でしょ。それから何で言った？」と言いなから、腕をはなした。彼女は何かにすがるようによく笑った。彼女が下を向いて目を閉じ、手を額にかざして肩をこきざみに震わせ、クッククックと笑うだけで、私達はみんな幸福な気持ちになるのだった。しかしその笑いが長くとだえている。

オランダ語で笑えるようになるうとは、夢にも思わなかった。先日はある漫談家の芸能三十年記念がテレビであった。彼は溢れる笑顔で歌い踊り、いろいろシーンを演じて笑わ

せるのだが、この善意に満ちた陽気な彼が、いじなひがみ屋を演ずる時は痛快である。

(ニコニコした顔をふとしかめて)「プレゼントなんて嫌なこった。大嫌いさ。子供の頃からブレゼントなんて、もらったことはない。あのサンタ・ニコラスのお祭り。(十二月五日、子供達のクリスマス)嫌ですねえ。友だちはおもちゃの汽車なんかもらって、ゆかの上をポーポーと走らせている。うちじゃ私が汽車にならなきゃならなかった。ゆかの上をはいずりまわって。(笑)兄弟姉妹が多かったから、何とか汽車のかっこうはついたけど。(笑)一人だったら汽車とはいえないところだった。(笑)機関車だけの汽車なんて。

(笑)毎日靴をだんろの前に並べましたね。(朝プレゼントがはいっている)朝おきて靴がちやんとあつた時はほっとした。(笑)当日はニコラスさんが来るっていうんで待ってたら、やってきたのが何と横丁のカフェのおじさん。(笑)ガウンをはおっているので、どこかで見ることがあると思つたら、テーブルかけですよ。(笑)背中に灰皿の跡がくつきりついている。(笑)……」

私はお腹をよじらせて笑いながら、ふと父のことを思う。彼は話を聞いている限り、おもしろい人と思われていた。彼の話は大ききでフィクションが混じっていたから、側で何度も聞かされる家の者は嫌で仕方なかったのだが。父を嫌っていた母も、そういうわけこう笑っていた。私は父と一切の絆を絶ちたいと思つていたのだから、私の笑い上戸が父ゆずりなどとは、死んでも認めたくなかったのだが、こうして笑いをとりもどしたのだか



ら、良しとしよう。父は「笑い薬」という貴重な妙薬を遺して、罪滅ぼしをしてみたのだと。

「野武士肝死んでもまあんだ生きとるぞ」と勢いし人も今は野の花

(歌人・アムステルダム補習校)



## 旅して想うこと

### E・K

と思い知らされました。

知人が車で郊外を案内してくれました。私は助手席で地図を広げていたのですが、道路の表示がわかりやすいのです。アルファベットのM、A、AA……と、数字との組み合わせで道路の大きさがひと目でわかるのです。例えばM1というのは、片側三車線以上の様な最も大きな道路で、M20というのは、数字のケタがふえた分少し狭い道ということになります。そして、交差点にもすべて番号がついていますので、私ですら、十五分後には立派なナビゲーターでした。交通網という公益サービスがこれほど整備されていることにも、イギリスのお国柄がうかがわれました。

昨夏、初めて憧れのヨーロッパ（今回は英仏二か国）を訪れる機会に恵まれました。海外を旅して、あるいは滞在して感じた、価値観や慣習の違いなど、様々な印象を述べたものは数限りなくあると思います。とはいえ、実際に自分で旅をし、人々と出会い、自分の目で見てくると、やはり、是非ともお話ししたいことがでてきます。

八月のイギリスは、文字通り世界中からロンドン見物に訪れた観光客であふれていました。最初はそれとは気がかなかったのですが、よくよく見てみると、皆、手に観光ガイドを持って歩いているのです。誰もが、一度でいいから英国を訪れたいと思う気持ちだが、いかに強い

パリへは、英国航空の飛行機を使って入りました。機内の座席で、ちょうど隣合わせた女性は、モリシヤスからバカンスで一人旅ということでした。三年に一度、一か月の長期休暇が取れるそうです。おじ様が、エト

ワールのバス停まで迎えに来て下さるとかで、空港から一緒にリムジンバスに乗っていくことになりました。エールフランスのバス乗り場で、彼女は親切にエトワール（凱旋門前）まで、大人三枚と言ってくれました。支払いは一人分と二人分別で、というと、カウンターのおじさんは、ぶ然として、大人三枚と言ったではないかと言うのです。仕方なく、彼女が一枚、私が二枚と言いついて購入しました。何だか融通のきかない論理に、少し不満を残したものの、バスはあの凱旋門の見える停車場へ無事に到着しました。モーリシャスのSさんと、お互いの良い旅を祈り合って別れた後、私は友人と二人、シャンゼリーゼ通り近くのホテルへと、トランクを押して歩き出しました。放射状の道の難しさを考えずに近道をしようとした私達は、ちょっと道に迷いかけてしまいました。日は暮れてくるし、人通りの少ない道で少し不安に思っていると、ちょうど通りかかった初老の紳士

が、「何かお手伝い出来ますか。」と救いの手をさしのべてくれました。こちらから道を聞く前に、不安そうな様子をみてとつての優しい言葉に、異国の地へ着いたばかりの私達は救われる思いでした。とはいっても、最初は変な人ではないかと疑ってしまったのですが。その後も地下鉄の駅で、やはり初老の紳士が声をかけてくれました。私達のパリは、優しい老紳士の街ということになりました。

パリを発つ日、空港であのSさんと再会するというドラマのようなできごとで、今回の私達の旅は終わりました。

小さいお子さん達の中でも、英語を習っているんだ、という声をよく耳にするようになりました。日本人、外国人を問わず、困っている人を見かけたら、気軽に手をさしのべられるような、そんな人に育って欲しいと思うこの頃です。

## 母と子でつくる民芸品

大楯 優子

身のまわりにある素材を生かして作る楽しさ、伝統行事に欠かせない小物を準備する楽しさは、そのままくらしの楽しさでもある。

観光客が旅先きで買い求めるように、私もチェコの民芸品といわれるものを身近に集めて、その素朴な美しさを味わう時期があった。その後、子ども達との生活が始まると、次第に作ることに心が向かうようになった。みやげ物として商店に並ぶほどに吟味された素材を用いるわけでもなく、精巧な技術

を使いこなすというわけでもないのだが、休日のひとつきをすごしながら、一緒に作ってきた民芸品がいくつかある。

### 絵付けたまご

絵付けたまごは、春を待つ心、春を祝う心のあらわれである。

一面に垂れ込めた雲が切れて、青空をかいま見ると、太陽の光の強さにびっくりする。朝晩は寒くて

も、コートトの重さが気になるようになる。芽を出し始めた草木をいつくしんで、ふと歩みを止める。春一番のれんぎょう（チェコ語では、「金の雨」と呼ばれている）が、枝一杯に花をつける。こうしてゆっくりと春分の日が近づいて来る。

このカレンダーの上での春の始まりは、必ずしも暮らしの上での春の始まりとは言えないことが多いのだが、それでも自然も人々も、春の生活を準備していく。

この春の訪れを象徴するのは、復活祭（イースター）である。宗教上の復活祭は、十字架にかけられたキリストの復活を記念する行事で、春分の後の満月直後の日曜日に行われるので、毎年、日にちは変わるようになる。

復活祭は、自然の復活、冬の間眠ったり、休んだりしていた動物や植物、生きるもの全てが甦って活動を開始する、その喜びを祝う季節の行事でもある。村々には、復活祭の二週間前の「死の日曜日」

の行事も残っていて、死や病気を象徴する人形を川に流し、冬に別れを告げる。復活祭の月曜日には、男性が柳の枝で編んだむちで、女性のおしりをたたき、女性は男性に絵模様を付けたたまごをプレゼントする習慣がある。また、スロヴァキアには、むちでたたくと同時に、水をかけると言うやり方も残っている。どちらも、本来は、キリストの死を悼んで集まって来た人々を、時の権力者が追い散らすのに用いた方法ということだ。また、復活祭の象徴になっている卵、ひよこ、あひるは、多産を表すともいわれ、多くの伝統行事に見られるように、宗教上の儀式と土俗的な習慣が結びついて、人々の間に生き続けているのだろう。また、たまごの殻に絵模様を付ける習慣は、キリスト教が伝わる以前に既にスラブ民族の間にあったことが、モラヴィア地方の発掘で確認されている。

さて、たまごの絵付けだが、単純な方法から複雑な方法まで、その手法は多彩である。

まず、たまごの上と下に小さな穴をあけ、口で吹き出すようにして、中味を出す。絵付けを終えた後に、細いリボンを通すこともあるから、穴を小さくすることに気を使う必要はない。殻の中に水を通して洗い、水を切るようにして保管する。もうたまごが安く出回っている頃だから、一度に用意して、中味をカステラ風のお菓子やオムレツに利用することもできる。

最も簡単なのは、油性サインペンで絵を描くことである。絵筆を使って、花やあひるを描き、ラッカーをかける手法を伝統とする村々もある。独特な手法は、いわゆる「ろう染め」である。ろうそくに火をつけ、溶けたろうを針金の先に付けながら模様を描く。小さなことをする時には、割りばしの先をとがらせて、先を少しつぶしてやわらかくしたのを用いると扱い易いし、たまごの殻に溶けたろうがのり易い。線描きでなくとも、ろうをつけたはしをはじくようにしてできる短い線を集めて、花の形や幾



何模様にするのも面白い。ろうが乾いてから染色する。染材を溶かした水の中につけ込む。既製の染材ではなく、たまねぎの皮を煮出した水につけるのも趣があつて、私は必ず一色に加える。布のろう染めと同様に、模様を描き変えながら何色か重ね染めをすることもできる。染色をした後、乾かしてろうそ

くの火にかざしながら、絵模様になつていろうそくを溶かす。やわらかい布や紙で少しづつふき取ると、完成した部分が見えてきて、楽しみが増す。その他に、たまご全体に絵具を塗って、釘のような物で引掻きながら模様を付けたり、麦わらを細く切ったのを張り付けたりする手法があるが、私個人



では経験がない。小さな葉を殻に張り付けるようにしてガーゼに包み、しっかりと結んだまま染材につけ込む方法もある。子ども達が幼稚園で作って持ち帰ったのだが、これは、火を使うこともなく、色が葉の下に染み込んで、思いがけない面白さが生まれて、楽しい方法の一つである。

出来上がった絵付けたまごは、一緒にしてかごにさらべたり、一つ一つにリボンを通して、花びんに差した小枝（季節がら白樺や猫柳が多いのだが）に結んで下げたり、壁掛けのように飾ったりする。

復活祭の月曜日、女の子達は胸をわくわくさせて、おしりをたたいてもらうのを待つ。家族以外にも、男の子達の家々を訪ね、昔からの詩を暗唱しながら、女の子のおしりを柳のむちでたたく。もっとも、代わりにいただくのは、絵付けたまごだけではなくて、中身の入った固茹でたまごやお菓子という場合も多くなってきた。

## とうもろこし人形

この国で栽培されるとうもろこしは、飼料用である。涼しい気候のせいか、改良する努力が足りないのか、背も低く、実も固い。若く実のやわらかいのをゆでて、街角で売っているのを見たことがあるが、それを珍しく思うほど、人の口に入るとうもろこしは少ないようである。我が家では、夏の料理の一つに入っていて、一回はとうもろこしのクリームスープを作るようにしている。茹でて、実をはずし、ミキサーにかけて漉すという作業を、あたかも儀式のように毎年繰り返している。このクリームスープの調理ととうもろこしの皮の乾燥がセットになっている。手に入れたとうもろこしの大部分が食べられず、皮ばかり山のように積まれたのを目の前にしてから始まったことなのだが。

よく乾したとうもろこしの皮を水に浸して、少しやわらかくしてから、形づくっていく。タオルでふいて水気を取り、頭にする部分、腕にする部分、胴

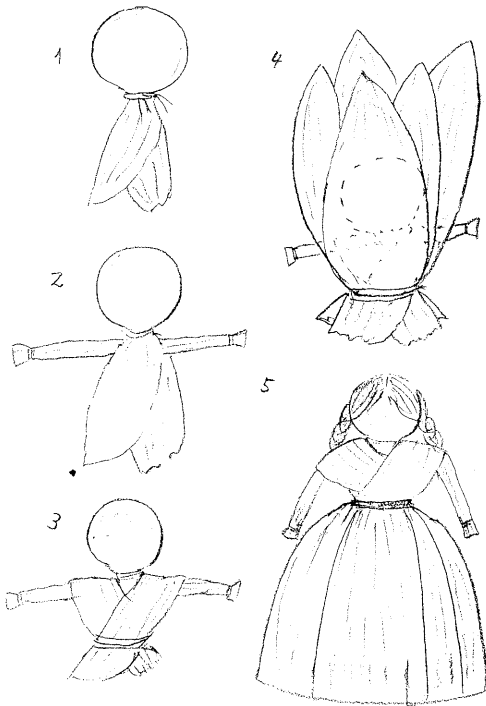


にする部分、スカートにする部分、場合によっては袖にする部分を想定して、選び分ける。幅が広くやわらかい皮を表面に用い、その他の皮は内側に入るところに利用する。

やわらかい紙や綿をまるめて、一枚の皮で包んで太目の糸で結び、頭を作る。細い針金を中心に巻くようにして、両端の手首になる部分を糸で

結び、腕を作る。頭の部分の結び目の下に腕をはさみ、胴のふくらみをつくるように、丸めた紙か綿もはさむ。三折りにした細長の皮二枚を、左右から首を包むように着せ、胸元を合わせてウェストの部分を糸で結ぶ。スカートになる皮を中表、逆さの状態ですらしながら、胴の回りに当てる。その上に同じやり方で、残った皮を芯になるように重ねて、糸でしっかり結ぶ。スカートの部分を返して下におろし、落ちつかせる。スカートの裾をはさみで切

りそろえる。端切れを利用したエプロンやスカーフを付けたら、腕を曲げて、ドライフラワーで作った花束を持たせたりすると、表情が豊かになる。頭へのりを付けて、麻ひもをほどこいて切りそろえた髪をのせてもかわいい。材料が足りない場合は、芯になる部分をクレープ紙で補うこともできるが、急がず



に材料を集めて、必要な皮を選び取る位の方が、家庭での民芸品作りに合っているように思う。

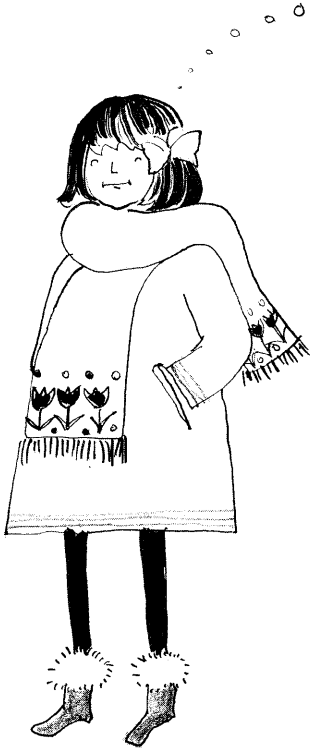
民芸品としてのとうもろこし人形は、おそらく、日本での姉様人形のようなものではないだろうか。

飼料に使われた後のとうもろこしの皮は、土間に積まれて燃料の一部になっていたにちがいない。そこから数枚取り除いても、困る人はいない。不要と思われ紙を折りたたんで人形を作る。不要と思われ

るとうもろこしの皮で人形を作る。遊んだ後は捨てて、また遊ぶために作る。作りながら上手になっていく。作りながら工夫が生まれる。母子で作る民芸品も、こんなふうだと楽しい。

こども達の作品を入れた引出しを開けるのも稀になってしまったが、毎年繰り返される伝統行事には、年を重ねて作ってきた小さな物を並べるのが、我が家の慣わしになっている。

(ブラハ在住)



\*\*\* ある日の育児日記から \*\*\*  
 \*\*\*  
 \*\*\* (14) 佐藤 和代 \*\*\*



圭が水ぼうそうにかかりました。といっても、熱は37度台で、初日をのぞけばいたって元気。小さい子ほど軽くすむというのは本当ですね。

問題は大人です。まず私が実家に電話をかけた。「私、水ぼうそうやった?」「いろいろやったからね、すんでると思うけど...」と、心もとなり返事。次に敬(主人です)が電話をすると、「水ぼうそう? やってないねえ」こちらは断言されてしまいました。これは大変だし、と言いながらも、うつるとは限らないよね、と軽く考えていた私たちです。圭

のブツブツが消えるころには、ほとんど忘れていたのです。

ところが、三週間後。敬が「どうもだるい」と会社を早退してきました。翌日にはすっかりブツブツが...。間違いない、水ぼうそうだ! 幸い(といっは敬に申し訳ないのですが)私は発病しなかったもので、二人そろって寝込むはめにはならなかったものの、大人にもうつるものなんだ、と思い知らされました。



さて、二週間も仕事を休むことになって、毎日会社や取引先に電話をしていた敬。「ちくしょう、みんな笑うばかりで誰も同情してくれない!」とぼやきどおしてした。



います。」

という話をよく聞いていたし、新聞でもファミコン症候群と称して、ファミコンばかりしている子はイライラしやすく、目ばかりでなく精神面でも良くない、というような記事を読んだことがあったからだ。でもその日、Tに泣かれやつと決心したのだった、我家でもファミコンを買おうと。反対だった夫を説得し、Tとは

○一日テレビと合わせて二時間まで

○一時間したら少し休む

○友達とはしない

という約束で、お誕生日を一月早めた十月九日、ファミコンをプレゼントした。

その日からTの頭の中はスーパーマリオ一色となった。今まで毎週欠かさず見ていたアニメも見ないで、毎日二時間テレビの前に座り込み、瞬きするのも惜しいほど夢中になってやっていた。口を開けば「1アップきのこを見つけたよ」とか、「一面の3をクリアしたよ」など、ファミコンの話ばかりだった。幼稚園でもそんな話

ばかりしているらしく、色々と友達から教えてもらって帰ってきた。おかしいのは「ファミコンをやると馬鹿になるぞ」と、あんなに反対していた夫もファミコン病になってしまったことだ。夜、駅を下りると「さあ、うちに帰ったらファミコンができるぞ」と思っ心うきうきしまうというのだから……。たしかにファミコンはおもしろい。Tのやっているのを見ていただけでも結構楽しめる。あつという間に時間が過ぎる。でも疲れるのも確かだ。そして最後は失敗して終わる。「今日はここまでクリアしたところで止めておこう」と、意識的に自分で止めないかぎりはそうなってしまう。いまでこそ上手に自分の気持ちに折り合いをつけて止められるようになったが、そうなるまではたいへんだった。物を投げ付けたり、人に八つ当たりしたり、突然泣きだしたり、何度私に「そんな、泣くようになるなら、もうファミコンなんかしないの！」

と叱られたかわからない。

しばらくして、「友達とはしない」という約束は無し

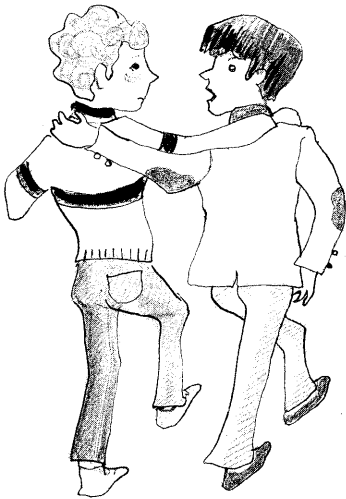
にすることにした。最初私は、ファミコンは一人でできるのだから、せっかく友達と遊んでいるときに、ファミコンなんかしてはもったいないと思っていた。だがそれは間違いだった。ファミコンもまた他のわざを競う遊びと同じで、競争相手や、観客がいなければつまらないものようである。もちろん陰でこっそり練習する時間も必要だが…。

そしてまた、時間のことでもTはこんなことを言い出してきた。

「○○ちゃんはいいな！ファミコンずっとやってても怒られないんだよ。どうしてぼくはいけないの？」

と。その時は一応、目が悪くなるし、外で遊んでお日さまをいっぱい浴びないと元気な子になれないのよ、と理由をつけて納得させたのだが、私の心のなかに葛藤が残った。今まで、水遊びでも泥んこ遊びでも好きなだけやらせてきた。なぜファミコンだけは許せないのか。どんな遊びでも充分遊べば必ず卒業し次へ進んでいく。制限しては絶えず満たされなくて、いつまでもあとを

引いてしまうのではなからうか。好きなだけやらしてみようか？ いや、でも、しかし…。なにか踏み切れないものがある。それはなにか。わからない。ファミコンの魔力のようなものに対しての恐れか…。



結局、全く制限をなくすということはできないまま、

友達と一緒に一時間まで（お母さん方と、一時間したらやめさせ外で遊ばせようと話し合ったので）・一人でもっとやりたいときは二日分やってもよいが、その替わり次の日はファミコン無しデーにする・ファミコン時間を貯めて日曜日にまとめてしてもよい、というように、少し幅をもたせるようにはしてきた。しかし、私の「これで良いのか」という迷いは絶えず頭から離れなかった。時の番人のように振る舞わなければならないのも気分のいいものではなかった。一年経っても一年半経っても、相変わらずTはファミコンが大好きで、ファミコン無しではいられなかった。以前はもっといろんなことをして遊んでいたのに……。なにか他にもっと夢中になれる遊びを見つけてほしいという親の願いもどこへやら、学校から帰ってくるとすぐファミコン。友達かきてもまずはファミコン。友達の方もそうでないと気が済まないようだった。そのうちに友達のなかでも二種類の子がいることに気が付いた。ファミコンの時間が終わると

ぼやっとしてしまい、Tが他の遊びに誘ってものつてこず、その辺にある漫画の本などをばらばらめくって、しばらくすると帰っていってしまう子と、さっと気分をかえて他の遊びも夢中になって遊べる子である。Tは後者の方なので親としては少しほっとするわけだが、前者の子達を見ると「ファミコンの害」という言葉が頭に浮かぶ。ファミコンを介してしか友達と遊べない。与えられた遊びしかできない。友達と遊びを作り出していく楽しさを知らない。これでいいのだろうか……。

ではいったい、ファミコンは他の遊びとどこが違うのか。ある人がテレビで

「ファミコンというのは小説のようなものですよ。昔は親に叱られながら、親の目を盗んで夢中で読んでいたじゃありませんか。」

と言っていたが、たしかにカセットの中には、自分が物語の主人公になって、何度も失敗しながらも知恵と勇気を奪って勝利を掴んでいく、というようなものもある。しかし、多くの子（幼児や小学生）が夢中になっている

のは、いわゆるアクションものやシューティングものである。シューティングゲームは指先の巧みさがすべてで、アクションゲームはそれと少し頭も使わなければならない。一生懸命練習して、人より上手くなって自慢してみせたり、いろいろ情報交換したりと、他の遊びとあまり変わらないように見える。でも、鍛えるのはタイピングと、二本の親指の動かし方だけである。またドッジボールやサッカー、野球等のカセットもある。現実離れた魔球とかウルトラシュートとかはあつたりするが、一応実際のそれとおなじだ。ただ違うのは、自分が本物の名選手になるのはいへんだが、ファミコンの中ではある程度練習さえすれば、すぐにヒーローになれるってしまうということだ。それも二本の指を動かすだけで。やはりこの辺りに問題があるように思う。すべてが実体験ではない。ボールをもつ感触、力の入れ方で違うボールの動き、当てられたときの痛みなどはファミコンではわからない。ファミコンの中でしかスポーツが楽しめるめないとしたら、やはりそれは不幸である。

もう一つ気になるのは枠組みが機械の側にあるということだ。最近のカセットは最初にスピードやレベル、BGM、どこからスタートするかまで自分で選択できるようになってきているものが多い。しかし、ゲームが始まってしまえばRPG（ロールプレイングゲーム）以外は、制限時間のなかでやらなければならないけなかつたり、次々に場面が進んでいってしまったたり、ゆっくりしていると敵がどんどん増えてきてしまつたりして、逃げ逃げ、早く早くとせきたてられてしまう。周りを見たり考えたりする余裕は与えられない。色々なことを瞬時に判断し、どうするかを決定していかなければならないのだ。この緊張感がやるものにとっては魅力であり、そうさせてしまう力に私は魔性を見してしまうのかもしれない。どんなに、自分が巧みに操りうまく進めたから成功したのだ、といても、所詮、決められた枠からは一步もはみ出たはいけない。すべて計算された結果にただ辿り着いたというだけなのだ。そこに創造性はない。…とこんなことを書いたら、「だからなんだと言うんだ」「何が悪い」と



ファミコン大好き大人から文句を言われそうだ。

もう一度、ファミコン好きの息子をもつ母親の立場に戻ってみよう。今思うに制限を付けなくともカセットが一つしかなければ必ず飽きるときがきたと思う。(まあ、それまでに目が悪くなってしまいかどうかはわからないが;) 現に充分遊んだ古いカセットなどは、全くほっぽられていく。だからそろそろ飽きてもよさそうなものだが、そのカセットに飽きた頃になると新しいカセットを買ってもらう機会に恵まれたり、自分は買ってもらわなくても友達を買ってもらったりして、結局次々と新しいカセットに出会ってしまい、飽きる間がなかったというのが本当のところだろう。私の友達は時間制限はせず、カセットの貸し借りを禁止している。それも一つの手だなと思う。ある時Tに尋ねてみた。

「友達と貸しっこしなければ、やりたい放題にしてもいいんだけど、今のままとどっちがいい?」

と。Tは少し考えてから

「やっぱり今のままがいいや」

と答えた。

さて、ファミコンを買って三年、現在の我が家は、というと、夫のファミコン熱はすっかり冷めた。この三か月全く手を触れていない。Tはどうかというと、ここ二週間ぐらい気持ちがファミコンから少し離れていて、たまにしかしない。今はブロックに夢中なのだ。ブロックで友達と宇宙戦艦ヤマトを作り、戦闘機を作って乗せ、管制塔を作り、乗組員の家も作って遊んでいる。また四、五人集まるとサッカーもよくやっている。しかし、それも単にあたらしいカセットが無いからだともいえる。きっと新しいカセットを買ったらまたファミコンに夢中になるのだろう。このレポートを書き上げて今、もう制限はやめようかと思っているのだが、さて、私にそれが実行できるだろうか……。

(はるにれの会)

昨年は、湾岸戦争の終結、ソ連のクーデター騒動と失敗、火山の大噴火と大きく揺れた一年でした。新しい年は、良い方向に動いてほしいものです。

今月は、ソビエト問題の研究者で、ソ連関係の本の編集・出版もなさっていらっしゃる伊集院俊隆先生に、ソビエトの幼児教育について書いていただきました。伊集院先生は、毎年数回はソ連に行かれるという親ソ家で、クーデター後も早速行かれ、直接ご自身の目で見られたソビエトの様子についても報告していただきました。貴重なお話をありがとうございます。

今月から、仲明子先生の連載「遊びのスクランブル交差点」が始まります。仲家の六畳間に集まった子ども達の、おみやさんごっこをめぐる「遊び論」を、六回にわたって、隔月で書いていただきます。どうぞ、お楽しみに。

\*

近ごろ息子は、背が低いことを気にし

ているようです。見かけはガッシリしていて、小さくなんか決して見えない子なのですが、クラスで前から三番目というのが気になるようです。

「牛乳を飲むと背がのびる」と聞くのと、大好きなジュースよりも牛乳の方を飲みます。「そんなに飲んだら、のびるよりも太っちゃうんじゃない？」と家族にひやかされても平気です。

先日、息子の友達のお母さんに「身長は夜寝ている間に伸びる」しかも「夜の十時頃に伸びる」という話を伺いました。息子にそのことを話すと、すぐにその気になって、その日から早速、早寝・早起きを励行しています。

はたで見てみると笑ってしまうくらい一生懸命です。

そんなに心配しなくても、今に伸びる時期になったら、見上げるほどにも大きくなるのでしよう、と思いつながら、今の息子の「大きくなりたい」気持ちを応援しています。

(K)

## 幼児の教育

第九十一巻 第二号

(一九九二年二月号)

定価四五〇円(本体四三七円)

平成四年二月一日 発行

編集兼発行人 本田和子

発行所 日本幼稚園協会

東京都文京区大塚二一一一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

印刷所 図書印刷株式会社

東京都港区三田五一一二一一

発売所 株式会社フレイベル館

東京都千代田区神田小川町三一一

振替口座 東京九一一九六四〇

電話 〇三三三九二一七七八一

●本誌購読のご注文は、発売所フレイベル館にお願いたします。

●方一、落丁・乱丁などがございましたら、おとりかえいたします。

# 2001年の子どもが危ないシリーズ

子どもたちを取り巻く様々な社会現象や問題点を各分野の第1人者が分析・追究、近未来の子どもの姿を予測しました。子どもの心身の健康のために、さらに、個性の伸長のために、子どもの置かれるべき未来の環境を考え、私たち大人がぜひ今しなければならぬことを提案しています。

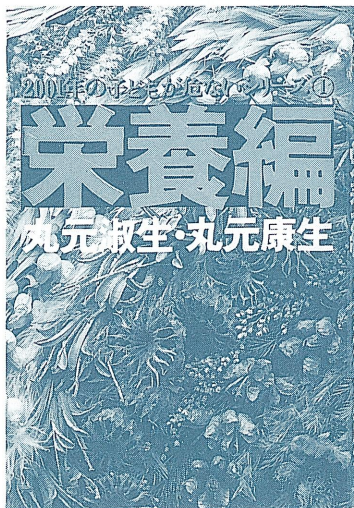
## 2001年の子どもが危ないシリーズ①

# 栄養編

飽食の時代の今日、豊かさをもたらした危険な食生活が確実に子どもたちの心身を蝕んでいます。子どもたちを取り巻く食生活の栄養学上の問題点を説き、2001年の未来に向けてあるべき食環境の知識75項目をサジェストしました。

### <内 容>

- 第1章 このままではいけない子どもたちの食事
- 第2章 子ども的心と体は食事でこんなに変わる
- 第3章 二十一世紀の食事はどうなるか
- 第4章 子ども食事をどうするか



丸元淑生・丸元康生 著

四六判・並製・252頁・定価1,200円(税込)

### —以下続刊予定—

シリーズ② 環境編 (鎌田 慧 著) 平成4年2月刊行予定

シリーズ③ 体の健康編 (村田光範 著) 平成4年6月刊行予定

シリーズ④ 人間関係編 (詫摩武俊 著) 平成4年10月刊行予定

シリーズ⑤ 心の健康編 (渡辺 位 著) 平成5年2月刊行予定

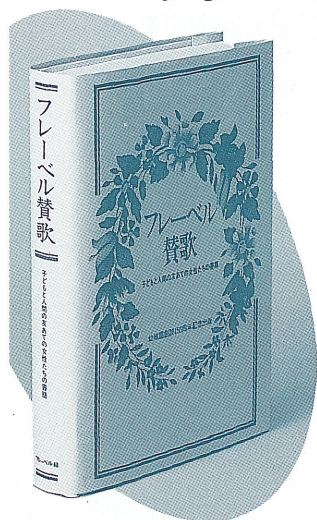
<わくはくは>フレール館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)3292-7783(代)にお問い合わせください。

キンダーブックの  
フレール館

# フレーベル先生・幼稚園創設150周年記念出版

## フレーベル賛歌

—子どもと人間の友あての女性たちの書簡—



### ●推薦します。

広島大学名誉教授／日本ベスタロ  
ッチー・フレーベル学会会長

莊司雅子

全国国公立幼稚園長会会長

江橋照雄

日本保育学会会長

岡田正章

全日本私立幼稚園連合会会長

小林龍雄

全国保育協議会会長

水岡 薫

岩崎 次男 他16名・訳

A5判・420頁・写真資料32葉

定価4,000円(税込)

旧ドイツ民主共和国アカデミー文庫と、パート・ブランケンブルクのF・フレーベル博物館に、フレーベルにあてた教え子たち約200人の1,000通を越える書簡が収蔵されています。一部公刊されていますが、それらを除いた約140通の書簡がドイツ幼稚園創設150周年を記念して1990年に出版されました。

本書はその完訳本です。

書簡はドイツ教育委員会と大学教育学部の委嘱をうけたH・ケーニツヒ教授の手によって精選され、年代順に配列されています。「さあ、私たちの子どもたちに生きよう！」という先生の呼びかけの言葉と、その根源にあたるキンダーガルテンの思想と、当時の社会や経済の困難さや人々の無理解とたたかう優れた魂に触れることができます。フレーベルを敬慕しキンダーガルテンの運動に身を挺した女性たちの知性と情熱を具体的によみがえらせます。

### 特 色

- ・幼稚園草創期のフレーベル先生の教え子たちの手紙を年代順に紹介し、その揺籃期に生きた人々の苦難と歓喜にいろどられた歴史的確言を集成しました。
- ・師・フレーベルに寄せられた教え子たちの数々の手紙は、幼児教育の父フレーベル先生の魅力ある人間像と教育思想のエスプリを余すところなく浮き彫りにします。
- ・“キンダーガルテン”運動に身を挺した女性たちの英知と情熱にあふれる生き方、考え方は示唆に富み、幼児教育・保育に携わる人々の使命感を喚起します。
- ・幼稚園の園長や保育者の立場からの保育内容や方法に関する相談や報告が多く、保育現場の得難い保育実践上の参考資料です。
- ・女性たちがいち早く獲得した職業的地位である幼稚園教員、保育者たちの苦難の歩みが生々しく表白されており、女性職業史、婦人解放運動史の貴重な資料です。

＜わたくしはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)3292-7783(代)にお問い合わせください。

キンダーブックの

フレーベル館